

そこに関わる人の「人間性」が
土木を壮大なロマンに変えることを
デ・レーケは教えてくれた

原点は国を愛し、 地域の暮らしを愛する心。



三宅 雅子氏 × 星野 知子氏

みやけ まさこ ●作家

京都市生まれ。1986年「阿修羅を横まわして」で日本文藝大賞女流文学賞を受賞して作家デビュー。オランダ水理工師ヨハネス・デ・レーケの半生を書いた「乱流」を1年間新聞に連載(後に講談社より刊行)、これにより8つの賞を受賞。第1回文化庁ドキュメンタリー映画優秀賞を受賞した「掘るまいか」の企画者。青山士のパナマでの活躍を追った「熱い河」など土木歴史物を得意とする。「円空 微笑の旅路」その他著書多数。日本ペンクラブ・日本文藝作家協会会員、中部ペンクラブ参与。岐阜県大垣市在住。

ほしの ともこ ●女優 エッセイスト

新潟県長岡市生まれ。法政大学社会学部社会学科卒業。NHK連続テレビ小説「なっちゃんの写真館」で女優デビュー。以後、女優、ニュースキャスター、ドキュメンタリー番組のレポーター、講演活動、執筆活動など多方面で活躍中。著書に「食べるが勝ち!」「トイレのない旅」「子連れババ(連れ)花のバリ」(以上講談社)「瀬流に乗って」(テレビ朝日)、「フェルメールとオランダの旅」(小学館)など多数。

わたしたちの生活が豊かになるに従い、
土木は、人々の暮らしから遠い存在に
なっていました。

しかし、ひとたび災害が起これば、
復旧に走り回る人たちがいます。

本当は、身近で
生活になくてはならないものであるはずの土木。
今回の対談では
そんな「土木の原点」を今一度見つめるべく
業界を外から、厳しくかつ愛情たっぷりの視線で
見守り続ける二人の女性にご登場願いました。



●三宅氏が輪中展で出会った当時、日本にあった
デ・レーケのたった1枚の写真

「輪中展」で見た1枚の写真が 土木への興味の始まり

星野 今日(三宅さんと私、女性二人が「土木」について
語るという企画になっています。聞くところによると、男性抜
きでこの対談が行われるのは、初の試みとのこと。確かに
土木という日本語は響きも漢字も堅くて、重くて、面白みに
欠け(笑)、取っ付きにくい感じがしますが、毎日の生活を
考えてみると女性であれ子供であれ無関係というわけでは
ありません。女性でありながら、土木に題材を得た小説を
多く発表されている三宅さんに土木の魅力についてたく
さんお話いただこうと思っています。まずは、三宅さんが土
木に興味を持たれたきっかけから聞かせていただけますか。

三宅 講演でもよく話題になり、お話することが多いん
ですけれど、私にとっても土木というのは、最初は子供の
頃見た「よいとまけ」の杭打ちのイメージでした。「母ちゃ
んのためならえんやこら、父ちゃんのためならえんやこら」
というあれです。総出で道を作る、あるいは、庭師の様に
石に鎖をつけて皆でヨイヨイ言いながら上げていく、そうい
う工事が土木だと。

土木のイメージが変わったのはデ・レーケという人物に、
写真で出会ってからなのです。彼について調べるうちに、
土木の意味も初めてわかりました。

星野 三宅さんが小説(「乱流」—オランダ水理工師デ
レーケ)で取り上げられたオランダ人技師のヨハネス・デ

レーケですね。

三宅 私がデ・レーケに一番最初に出会ったのは、昭和53年、地元・大垣市で開催された「輪中展」でした。実はその2年前、昭和51年に岐阜県では長良川の右岸が明治の改修以来70年ぶりに決壊し、大変な水害になりました。ところが、輪中堤^{※1}で守られた地域は水が入らず、水害に逢わずにすんだ。70年間洪水が起きなかったことで、みんな輪中というものを忘れていたわけですが、この水害で「輪中文化を見直そう」ということになり、企画された展示会でした。

●輪中堤図



※1 輪中堤：集落を水害から守るために、集落全体を環状に囲んだ堤防のこと。

私だけでなく、初めて輪中の持つ知恵にふれた人が多かったようで、会場には毎日大勢の人が詰め掛けていました。その会場の一番最後の壁に、B5ぐらいの大きさの写真のコピーが貼ってありました。技師達の真ん中に一人の外国人が映っていたんです。「木曾三川を外国人が来て分流した」という説明書きだけあって、名前も日付も入っていない——。私はそれを見て「おやっ」と思ったんです。

星野 それが、三宅さんが土木に興味を持つきっかけとなった貴重な写真。

三宅 ええ。有史以来、2000年間洪水に悩まされていた木曾三川を分流し、70年間洪水から私たちを守ってくれたなんてすごいじゃないかと。だけどそのときは写真に映っているのが誰なのか、それがどういう経緯だったのか、何ひとつ書いてない。市役所に聞きに行っても、詳しい事はわからなかった。これはどういうことだろうと。新聞社なら知っているだろうと尋ねたところ、デ・レーケという名前だけがわかりました。それからですよ、私の追っかけが始まったのは。

星野 30年も日本に住み、それだけ大きな仕事を成し遂げた人だというのに誰も知らなかったんですか。

三宅 地元の人も土木関係者も知らなかった。木曾三川分流なんて、とても簡単に工事ができるようなものではないのに、その記録が消えている。私が一番興味を感じたのはそこでした。

星野 1枚の写真に心魅かれるものがあったって調べ始めたら、調べていくうちにどんどん面白くなっていったという感じですか。

三宅 調べているうちに、自分が掘り起こしているものが単なる岐阜県の歴史ではないということに気づきました。これは日本の歴史そのものだと。なぜ名前も知られずに消えていったのかということ、それは歴史の中にデ・レーケを置いてみないとわからない。事実、そうすることによって、それまで気づかなかったものが見えてきた。技術から追いかけるだけでは、わからないままだったかも知れません。

途中、岐阜新聞での連載を頼まれて…、結局、全部わかるまでに17年かかりました。もちろん、掲載が始まった時点ではまだわからないことだらけでしたが、不思議なもので連載を始めるとそれまで手に入らなかった資料が舞い込んできたりして、不明だった部分がどんどん明らかになっていきました。

●デ・レーケのケレップ水制 右・木曾川 左・長良川、真中が分流の新堤



星野 17年！彼の人生ドラマとしても面白く読ませていただきましたけれど、デ・レーケという人物が本当に魅力的ですね。木曾三川以外にも、日本各地で砂防工事、治水工事をやり遂げて——。

三宅 ええ、とても魅力的です。私も何度もオランダに飛んで、デ・レーケの生まれた村を訪ねたり、デ・レーケのお孫さんに会ったりしましたが、あの時代に大きな志を抱いて日本にやって来るなんて並みじゃありません。そして、他の人は国へ帰るのに、この人だけは残る。そういうところにまた疑問を持ち、追っかけが続いたというわけです。

星野 こうしてお話を伺っていると、本当にデ・レーケに惚れていらっしゃるんだなあという感じがします(笑)。どこが一番惚れる部分なんですか。



●ヨハネス・デ・レーケ



●デ・レーケとエッセル

三宅 仕事に関して、自分自身を非常に高く買っているところですね。デ・レーケはオランダの海岸の堤防を築いている親方の次男として生まれ、10歳の頃から父親と現場に出ている人なので、自信もあるし、現場にも強い。

星野 私もオランダへ行きましたが、あの国の人は本当に海面より下に住んでいるんですね。オランダの人たちって、今も水と戦いながら自分たちの住むところを作り続けているんだと感動しました。

三宅 オランダは2000年かけて国づくりをしたの。そういう歴史がある国なんです。

淀川改修の担当者として赴任早々、エッセルというエリートと一緒に現地を視察したデ・レーケは、その場で夫は何人、薪何束、石がこれくらい必要だと数字を挙げて伝えたそうです。まさかと思ったエッセルが事務所に戻って計算してみると、果たしてデ・レーケの言った通りの数字になった。驚いたエッセルは自分の母親への手紙の中で、「デ・レーケ君の方が現場に強い。もし僕がデ・レーケと組んでいなかったら日本の技術者は頭がいいからすぐに僕を見抜いたでしょう」というようなことを書いています。「でも、デ・レーケの方が僕よりずっと給料が少ない。日本への貢献度はデ・レーケのほうがずっと高いのだからもっと給料をあげたいと思う」という一文もありました。明治のいわゆるお雇い外国人にはイギリスやフランスなど各国から招かれた人が大勢いる中で、デ・レーケにはオランダ人としての誇りがあつたんじゃないかと思えますね。名誉のためとか、お金のためとかではなくて、誇りをかけてただ仕事を全うする、そういうところが男らしいなど。

彼のお孫さん、もう72、3歳になられる心理学の先生な





んですが、その方から「うちのおじいさんは三宅先生の恋人だね」ってからかわれました(笑)。

彼を通じて、土木技術者の高等さを知り、国づくりをする土木のすごさに気づかされました。

星野 デ・レーケのような人たちがいて、日本人も一生懸命勉強した。そのお陰で、今日のように日本の土木技術も進歩したわけですね。

見えないところで基礎を支える 土木技術者の想いに応える

三宅 デ・レーケは日本から帰った後、揚子江の支流の改修工事で上海に招かれ、技師長を務めました。最後はドイツの技師に追い出されてしまうんですが、^{しんせつ} 浚渫したデ・レーケに中国人はこうお礼を言ったそうです。「あなたの仕事は川の中で見えないけれど、それを守っていくのが私たちの仕事です。とても感謝しています」と。中国人は見えない仕事というものに対してきちんと敬意を払っている、やはり偉いですね。

星野 デ・レーケもそうでしたが、土木ということで何かを成し遂げても割り合い名前は残らないケースが多いように感じます。これは何故でしょう。建築家とかになると、名前がちゃんと残るのに。

三宅 私が平成5年に土木学会の出版文化賞を頂いた時、レインボーブリッジを作った会社の方も一緒に受賞されて、橋桁に名前を入れるための銅版を頂いておられました。そのとき、私はそれを見ながら、やっぱりシビルエンジニアの人も堂々と名前を出されてもいいんじゃないかという思いを強くしました。そうすることで仕事に対する自覚も

深まるし、名前も残ります。でもどなたかが「土木技術者は名前が残らないのが粹なんだ」とおっしゃったこともありました(笑)。

星野 土木の一番大事なことは、見えないところに時間とお金がかかっている。橋だったらデザインじゃなくて、基礎や通る人からは見えないところに技術が凝縮されている。そこをわかって欲しいと土木関係の方がおっしゃるのを見て、本当にそうだなと思ったことがあります。だったら、普通の技術者の方たちも何か形になるものを残してもらえたら、もっとやり甲斐が出るに違いありません。

三宅 土木に関しても少しずつみんなの意識が変わりつつあるようなので、いずれそれが当たり前になるときが来るかもしれません。

人間の営みに欠かせないものだからこそ 美しさや環境との共生が配慮されるべき

三宅 この写真、これは明治時代に作った堤防の土の中から発見された「四間木樋」というものなんですが、美しいでしょう。堤防で周囲を囲んでしまうと水が入らないかわりに出ていかないということになるので、湛水を木樋へ流してここから川へ流すようにしたものです。満ち潮になったら扉が閉じて、引き潮になったら開く仕掛けになっています。

星野 これは木を組んで作っているんですか。

三宅 檜です。岐阜県は檜の国だから。

星野 100年経っているというのにこれだけしっかりして、これだけ美しいなんてすごい。基礎がこんなに綺麗だなんて。

三宅 仕事が綺麗なんです。土の中を通すので見るというわけでもないのに、中はもっと綺麗。徳川時代のもの



ではないかと、私は思っていました。

星野 日本人も素晴らしい技術を持っていたわけなんですね。明治以前の土木技術で作ったものには綺麗なもの、美しいものがたくさんあります。今でも機能を保ちながら、造形的にも美しく哀愁も漂っているようなもの…。私も今日、増田彰久さんという方の『近代化遺産を歩く』という本を持ってきたんですが、この中にもいろいろな古い建築物の写真が紹介されています。どの写真を見てもすごく綺麗で、日本の土木を見直すと同時に日本にまだこれだけのものが残っているということに感動します。

三宅 一方で失われていくものもあります。デ・レーケが木曾三川の分流工事をしたときに、水位を調節するための閘門(こうもん)を日本人が設計して造りました。それがヨーロッパ的ですがすごくいいものだったの。ところがこの間、腐ってきたゲートを付け替えることになった際に、ついでに「便利に」とモーターを取り付けちゃったの。モーターを付けるためには石も削らなければと、色々と現代的になってしまいました。それを知った広島大学の馬場先生が「歴史的遺産は歴史的遺産の形で残して欲しい」とものすごく怒られてね。でももう遅かった。

星野 一時期、先代が作ったものをどんどん壊して合理的に作りかえることばかり優先されてきた時代がありましたが、今ようやく歴史的遺産という考え方も認められるようになって、いいものは残していこうという考えに変わりつつあるような気がします。

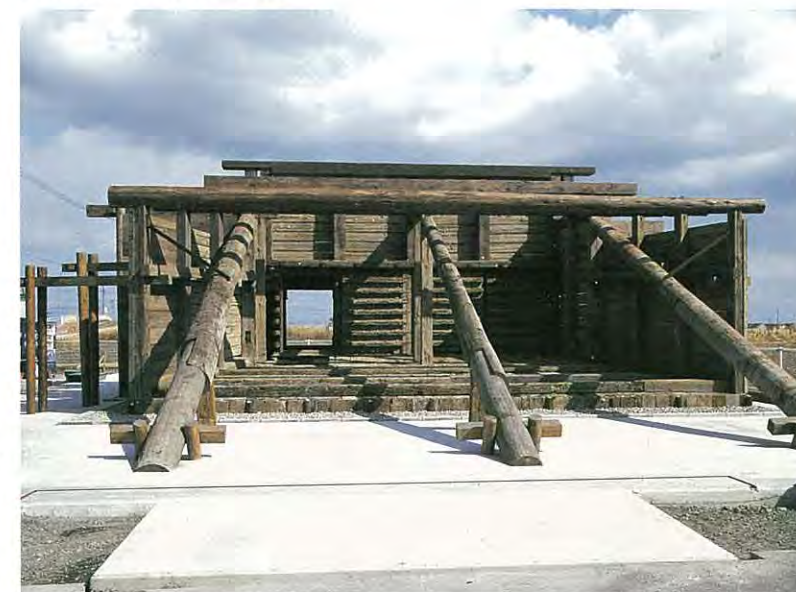
三宅 そうですね。長良川河口堰の問題などが注目された時期、平成9年に河川法が改正されて以降ですね、流れが変わったのは。環境に予算がおけるようになって、保存や整備のやり方が色々できるようになったことが大きいと思います。

星野 環境に関する日本人の意識が変化すると平行して、土木を取り巻く環境もずいぶん変わりましたね。今までだと、お上任せにしていたところを地元も意見を言うようになったし、具体的な計画案をちゃんと示せと要求もできるようになった。

三宅 私が書き始めた頃と比べたら、土木技術の価値



●四間木樋水門口に立つ三宅氏



●四間木樋の復元

に対する意識もすごく変わりました。

星野 その分、市民も勉強しなくてはいけないので、土木がある意味、すごく身近になって来ています。

三宅 地元のことは地元の人が一番知っていますから、お上任せ、あなた任せではなくてお互いに意見を言い合えるようになることはとてもいいこと。

星野 環境という問題があるからこそ、地元と共同プロジェクトができる。「美しい土木」というか、未来に誇れるようなものを作っていって欲しいですね。

三宅 デ・レーケが何十年前に唱えた「山水一系」や「蛇行河川」「遊水池」という、自然の摂理に従ったやり方がスイスやドイツなど世界的に見直されてきています。

村人たちだけで造った 生命の道

星野 三宅さんが奔走されて映画になった「掘るまいか」、あれは新潟の山古志村を舞台にした話なんですけど、私も母も知りませんでした。

三宅 星野さんは新潟のご出身でしたね。

星野 私は長岡ですが、母が山のほうの生まれなので、山古志村は母も私もよく知っているんです。私なんて、隣にできた新しい中山トンネルを車で走ってます。なのに、その隣にある古いトンネル(中山隧道)が村の人たちが手掘りで掘ったトンネルで、こんなドラマがあったなんて少しも知りませんでした。これだけの話ですから、新潟の人は皆知っているんだろうと思ったから誰も知らないんですよ。

三宅 そうでしょう。私自身、あのトンネルを知ったのはほんの偶然でした。でも、これはすごいから映画を作ってあげましょう、と言っちゃったんです。

星野 その経緯はどういうものだったんですか。

三宅 平成7年の土木の日に新潟で新潟土木学会があり、青山 士さんの講演をしてくれということで私が呼ばれました。青山さんはパナマ運河開削に参加した唯一の日本人ですが、帰国後は信濃川大河津分水の工事をされたということで、彼を小説に書いていた私が招かれたよう

●パナマ運河



でした。

そのあと、県の土木部長が手で掘ったトンネルがあるからと誘って下さって、山古志村まで一緒に見に行っただけです。それが最初。その後すぐに、今度は一人でもう一度見に行きました。当初は本に書くつもりで、出版社にも話をしてあったんですが、このときにね、やっぱり映像だと。壁に残るつるはしの痕を見たとき、鳥肌が立って、絶対ドキュメンタリー映画だと。私が本に書いてもわからない掘り痕も、映像だったら一発で伝わる。何のあてがあるわけでもないけれど、とにかく映画会社の人を探そうと、辿り着いたのが橋本監督の会社でした。



●中山隧道と村人たち

星野 映画をご存じない方のために簡単に紹介すると、山古志村は新潟の豪雪地帯にある村で、真冬は4~5mの積雪で吹雪で道に迷う人が絶えず、急病人が出ても救助が間に合わない。住民はそんな苦境を何とかしようと、16年かけてつるはしだけで約1000mの中山隧道を完成させる——そういう映画です。

三宅 村人たちは、技術無し、金無しで掘った。映画づくりも同じでした。映画のことはまるでわからないし、お金もない。結局寄付を募って、6年かかって映画にしました。50何年前のトンネル掘りに参加された方はもう70、80代なんですが、今映画を作ることができたのも大勢の関係者のおかげだと思っています。

星野 新潟県民でさえ知らなかったことを掘り起こし、しかもこういう後世に残るものに仕上げたってということに新潟県民としてすごく感謝します。その情熱ってどこからくるんですか。

三宅 やっぱり自分が感動することですね。あんな山奥のたった37軒しかないような村で、陳情に行っても取り上げてもらえない。それなら、自分たちで掘ろうと立ち上がって、技術もお金も無い村人たちがよくまあ無事で貫通させたなど。そこに自分が一番感動したから——

星野 危ないガスが出てきたり、落盤が起きたらと考えると、危険と隣合わせの難工事…。山古志村の人たちは、それだけ切実に外と通じる道が欲しかったということなのでしょうね。うちの母も弟が盲腸になったときにそれに乗せて峠を越えなければならなかったという話をしていました。盲腸でも命を失うこともあったそうです。

三宅 日本中、そういうところがあちこちにありました。たまたま、あの村は根性がある自分たちでトンネルを掘ることができたけど、掘れない村の方が圧倒的に多かった——。いかにインフラが大事かということを嫌というほど感じますね。今でも公共事業には賛否両論ありますが、必要な事業は推進して欲しいと思います。

土木もビジネスも人間性が大事 その意味で関西には根強いパワーがある。

星野 お話を聞いていると、やっぱり土木って面白いですね。今、興味を持たれている人とか土木というのがあります。

三宅 興味を持っている人は青山 士ですね。青山は「この世を自分が生まれてきた時よりも良くして残したい」をモットーとした人。もし今、同じことを言う技術者がいたら、私

はその人に仕事をお願いしたい。利害関係ばかりではなくて、土木に対する自覚を持った人材が作るもの、作っていくところに土木の発展性があります。これからは人間性ですね。会社組織でもそう。人材のいる会社は発展するけど、逆に部下を認めない経営者の会社はつぶれます。

星野 人間性、これがキーワードですね、土木にしる、企業経営にしる——。作った人の人間性がそのまま感じられるものを作って、それが後世に伝わっていけば素晴らしいですよ。

三宅 そのためには、その土地に合うものを作ることが大切。東京の設計



●青山 士

を岐阜県に持ってきても駄目なんです。東京の人はつい東京の目で見ても東京の頭で考える。その点、関西の人は関西の文化が一番だと思っているでしょ。私自身関西生まれで、関西にもものすごく愛着があります。東京に対して“へえこら”しない姿勢がね、いいんです。

星野 実際、東京から見ると、関西って元気だなあって感心させられます。

三宅 これは雑誌で紹介されていた大阪のある塗料メーカーの社長の話ですが、「ペンキの中には環境によくないものもあるから、これ以上儲ける必要はない」ということでした。「もっと儲けたい」と思う企業が多い中、環境を考えたらある程度の儲けだけでいいのだと言える経営者なんてすごい、それこそ人間性を感じます。中小企業でも、大阪からはこういうユニークな経営者がいっぱい出ています。新しい可能性は意外とそんな中から生まれてくるんじゃないかという気がしますね。関西には根強いパワーがありますから。

(本対談は2004年9月8日に行われたものです。)

◆ヨハネス・デ・レーケ (Johannis de Rijke) 1842~1913年
土木技師。明治6年(1873年) オランダより来日し、30年余にわたり、淀川や木曾三川をはじめ全国の主要な河川の改修に携わった。明治36年、その功績に対し、離日に際して勲二等瑞宝章を授けられた。

◆青山 士(あおやま あきら) 1878~1963年
パナマ運河開削1904~1911年(明治37~45年)に心血を注いだ、たった1人の日本人土木技師。静岡県磐田市出身。帰国後も荒川用水路、信濃川大河津分水自在堰など数々の河川工事を指揮して暴れ川を治め、日本の土木史に偉大な足跡を残した。

◆資料提供
荒川下流河川事務所、淀川資料館、木曾川文庫、山古志村/松崎氏
三宅雅子氏/写真等資料多数